



TITLE:

<大會抄録>中華工黨と沈若仙

AUTHOR(S):

江田, 憲治

CITATION:

江田, 憲治. <大會抄録>中華工黨と沈若仙. 東洋史研究 1987, 46(3): 646-646

ISSUE DATE:

1987-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154206>

RIGHT:

中華工黨と沈若仙

江田憲治

一九一九年六月八日、すなわち上海五四運動が質的な轉換をとげる三罷闘争の段階に入つて四日めの上海各紙には、中華工黨の「宣言」が掲載された。それは前日の六月七日に、同黨文牘部幹事沈若仙以下一八職種の労働者代表が署名し發表されたものであった。

わが國の國民が強權の壓制を受けること今日すでに極點に達した。……われわれ工人はみずから行動し、各職業の工人がそれぞれ小工團を組織し、それから連合して大工團をつくることを主張する。第一步に工人のデモをおこない、第二步に工界の大罷工をおこない、第三步にわれら數十萬工人の赤血を犠牲にして野蠻なる強權と戦わん。

中華工黨はすでに五月の時點で先驅的なスト提起をおこなつており、この宣言が六月七日というスト擴大直前の時點でさまざまな職種の労働者代表の名で發表されたことを考えあわせると、かれらの活動は全面的ストライキへとすすみつつあった上海の労働者を煽動し、リードしようとするものであったといつてよい。

だが、本来、民生主義の實行や工界の福利とともに工業の振興を目的としたブルジョア工界團體たる中華工黨が、なぜこのようなアナキズムの影響がみてとれる「宣言」をなしたのか、從來の研究では明らかにされていない。本發表では、一九一七年四月以降、中華工黨の理論的指導者として活動した知識人、沈若仙の思想と行動

をおうことでこの問題を解明し、あわせて五四時期におけるアナキストの役割について述べたい。

明清時代における民間宗教の歴史的位置

浅井紀

明清時代、羅教や白蓮教と呼ばれる異端的民間宗教が民衆の間に廣まり、しばしば王朝權力に對抗する民衆反亂を引き起こしたことは周知の事實である。しかしながら、王朝權力によつて邪教とされ、彈壓の對象となつたこのような民間宗教の教義がいかに形成され、いかなる特質を有するものであるかという點については、いまだ必ずしも十分には解明されていない。

明代、思想界においては儒佛道三教一致の考え方が著しく強まり、士大夫の手によつて、三教主義に基づいて民衆に勸善懲惡の道徳を説く善書が作られ、流通した。これに對應するとく、明代後半より、民間宗教においては、善書に説かれたごとき思想の影響を受けながらも、善書とはまた異なる終末論的救済を説く寶卷が多數創作されるにいたつた。本報告では、寶卷に説かれているごとき民間宗教の教義が、支配階級たる士大夫の思想と共通の基盤を有し、獨自の變容を遂げて異端的内容を具備するにいたつたことを明らかにしたい。士大夫の思想と民衆の思想とは、明代の社會變動を背景として、相互關連のもとで理解されるべきであると考えられる。